

## 米国 果実とナッツ類の生産見通し(主要果実抜粋)

米国農務省経済調査局 2023年9月28日

この報告書では、米国の計量単位が使用されています。メートル法の単位への換算率は次のとおりです。

1ポンド=約453.6グラム(1億ポンド=約4万5千トン)、1米トン(ショートトン)=約907kg(1万米トン=約9千トン)、

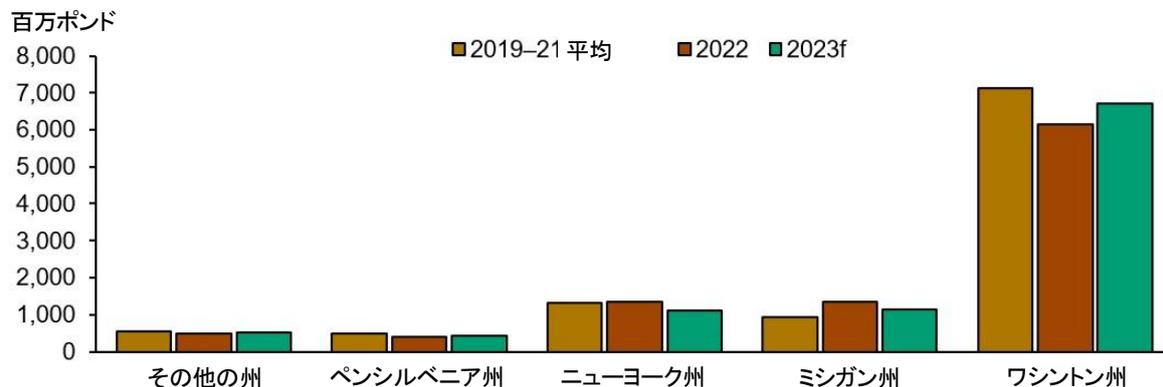
1エーカー=約0.4ヘクタール、1ガロン=3.785リットル(1億ガロン=約38万キロリットル)

## 非柑橘果実の見通し

## &lt;リンゴ&gt; 米国の生産量は持ち直し

2023/24年度(8月~7月)の米国のリンゴの総生産量は、前年比1.5%増の99億ポンドと予測される。最大の生産州であるワシントン州の生産量は前年比9%増の67億ポンドと予測される(図2)。ワシントン州の2023/24年度産のリンゴは、昨シーズンのような春の低温の影響を受けなかったが、現在の予想生産量は2019~21年の時期よりもまだ少ない。ワシントン州果樹協会は、果実の品質は優れているとしており、また有機リンゴが今シーズンの同州の生産量の15.7%占めると推定している。農務省農業統計局のミシガン州の生産量予測は、過去最高であった昨年より15%下回るが、2019~21年の平均を24%上回っている。ニューヨーク州では、暖冬による耐寒性の低下と5月中旬の開花中の低温により、予測生産量は昨年と比較して19%減少した。農業統計局の予測が現実になった場合、2023年のニューヨーク州のリンゴ生産量は2012年以来の最低となる。低温の影響は州内で不均一であったが、コーネル大学は一部のリンゴ生産者は収穫量の95%を失ったと報告している。農業統計局は9月時点で、ニューヨーク州のリンゴの30%の品質が非常に悪い、または悪いと報告しており、果実の品質も懸念材料となる可能性がある。

図2 2023年のワシントン州のリンゴ生産量は増加



f = 予測値

注: リンゴ生産量の推計の対象は商業生産を行う果樹園のみ。商業生産を行う果樹園は結果樹本数 100 本以上の園地と定義される。

その他の州には、カリフォルニア州、バージニア州及びオレゴン州が含まれる。

出典: 農務省農業統計局「非柑橘果実及びナッツ類の概要 2022」及び「作物生産見通し(2023年8月)」に基づき農務省経済調査局が作成

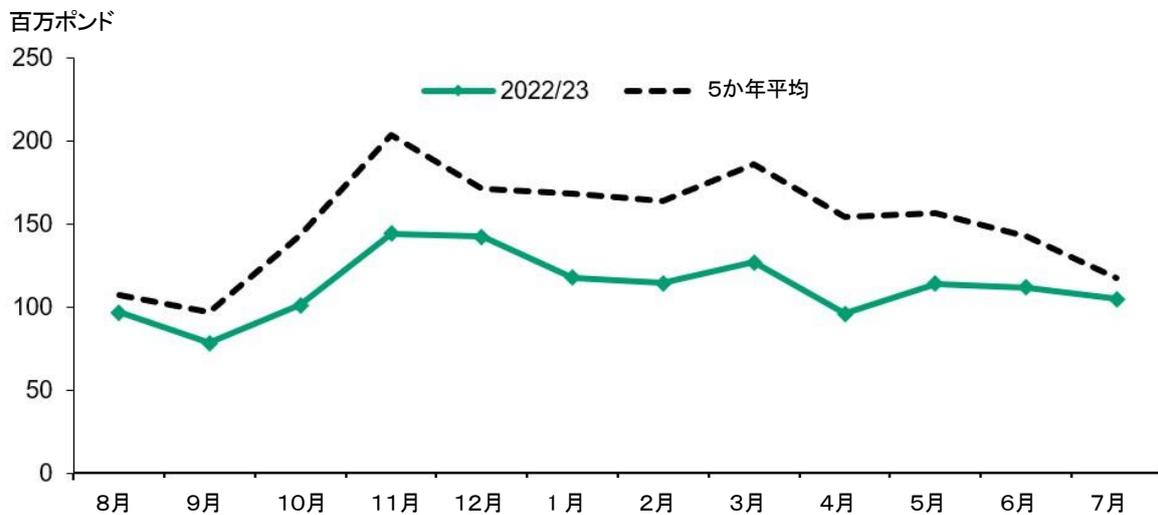
農務省経済調査局は、2023/24年度の生鮮市場向けのリンゴの供給量が昨年の64億ポンドから約2.5%増加すると推定している。加工仕向量は、ワシントン州の増加がニューヨーク州とミシガン州の減少に匹敵するため、昨年とほぼ同じになると予想される。昨シーズン、ワシントン州は加工用リンゴの42%を占め、ニューヨーク州とミシガン州は合わせて43%を占めた。

**2022/23年度の生鮮リンゴの輸出は減少:** 2012/13年度以降の平均で、米国の生鮮市場向けリンゴの約25%が輸出された。2022/23年度の米国の輸出品量は、前年度比で15%減少し、5か年平均を26%下回った(図3)。有機リンゴは2022/23年度の生鮮リンゴの輸出品量13億5千万ポンドの14%を占めた。メキシコは米国の有機リンゴ輸出品量の79%を占め、引き続き生鮮有機リンゴの最大の輸出先であった。

米国通商代表部は2023年6月、インドが2018年6月に米国のリンゴに課した報復関税を撤廃すると発表した。インドは2017/18年度には米国の生鮮リンゴ輸出品額の16%を占め、メキシコに次ぐ第2の市場であったが、2022/23年度までにインド向けの輸出品額は合計140万ドル未満となり、市場シェアでは第30位の市場と

なった。複数の業界誌は秋の米国産リンゴの収穫に先立って追加関税が撤廃されることを歓迎しているが、米国の生鮮リンゴ輸出は、トルコ、イタリア、イラン等、現在のインド向け有力輸出国と競争する必要がある。

図3 2022/23年度の生鮮リンゴ輸出量は5か年平均を下回る



出典：米国商務省センサス局のデータを使用して農務省経済調査局が作成

### <ブドウ> 2023年の米国の生産量は増加する見込み

農務省農業統計局の2023年8月中旬の予測では、2023年の米国のブドウ生産量は125億7千万ポンドで、2022年の118億5千万ポンドから6%増加するとされていた。しかし、8月の予測はハリケーンヒラリーがカリフォルニア州に上陸する前に発表されたものである。この嵐による甚大な被害の報告を踏まえると、実際の生産量は農業統計局の8月の予測を下回るものと予想される。

カリフォルニア州は、米国のブドウ総生産量の約94%を占め、突出して最大のブドウ生産州である。醸造用のブドウ(76億ポンド)が、カリフォルニア州のブドウ総生産量の60%以上を占め、約20%が生食用(23億ポンド)で、残り(19億4千万ポンド)が干しブドウ用である。8月中旬の予測では、カリフォルニア州の2023年のブドウ生産量は118億4千万ポンドで、2022年の110億2千万ポンドから7.4%増加するものと見込まれる。2023年の生産量の増加は、前年比12.4%増加すると予想される醸造用ブドウの増加に帰することができ、この増加は干しブドウ用の生産量の減少を上回るものである。

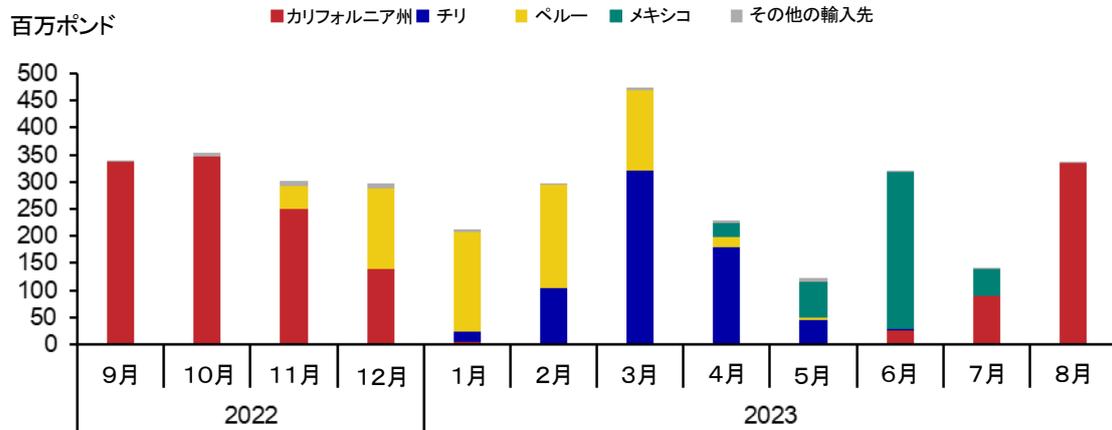
ワシントン州のブドウ生産はカリフォルニア州に次いで第2位である。2023年のワシントン州のブドウ生産量は、2022年の8億2,500万ポンドから11.5%減となる7億3千万ポンドと予測される。

醸造用のブドウがワシントン州のブドウ総生産量の58%を占め、残りの42%は果汁の製造に使用される。ワシントン州では、近年、ブドウの栽培面積が減少しており、2020年の7万6千エーカーから2022年には7万2千エーカーに減少した。

**ハリケーンヒラリーが生食用ブドウの収穫量に対する業界の期待を弱める：**農務省農業統計局の2023年8月のブドウ生産量予測は、2023年8月下旬にハリケーンヒラリーがカリフォルニア州に上陸する前に発表された。ハリケーンヒラリーは、生食用ブドウの収穫の最盛期にブドウ園に影響を与えた。生産者らは、この嵐の風雨でブドウが裂果したり落下したりし、また過剰な水分によりカビが発生したと報告している。カリフォルニア州生食用ブドウ委員会は、ハリケーンがカリフォルニア州に上陸した時点で収穫が済んでいたのは生食用ブドウの30%だけであったと報告した。ハリケーンの後、同委員会は、未収穫の生食用ブドウの35%が失われると推定しており、カリフォルニア州の生食用ブドウの生産量は30年近くで最低になる可能性がある。

8月から11月にかけて、カリフォルニア州は国内向け生食用ブドウの主要な供給源である(図5)。ハリケーンヒラリーの被害による損失は、冬になってペルーとチリからの輸入量が増加するまで、価格に上昇圧力を与える可能性がある。

図5 生食用ブドウは季節によりカリフォルニア州産から輸入ものに移行



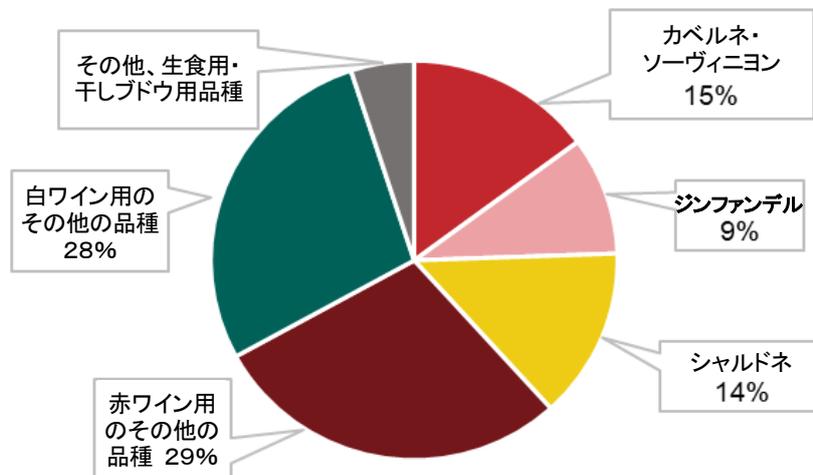
出典：農務省農業流通局「市場ニュース」の入出荷データを使用して農務省経済調査局が作成

2022/23年度の生鮮ブドウ輸入量は記録を更新：輸入された生鮮ブドウは過去3シーズンの平均で国内供給量の55%を占め、20年前の46%から増加した。2022/23年度には、生鮮ブドウの輸入量は史上最高の16億4千万ポンドに達した。ペルーはチリを追い抜き、米国にとって最大の生鮮ブドウの輸入先となった。ペルー産のブドウは現在、輸入の36.5%を占めており、チリ産の34.7%をわずかに上回っている。ペルーは、生食用ブドウの主要産地であるイカ県の気象条件が良好であり、2023/24年度の生産量の増加が見込まれる。ペルーとチリの両国にとって、米国市場は生食用ブドウの最大の輸出市場である。

カリフォルニア州のブドウ栽培面積の60%以上が醸造用である。カリフォルニア州の2023年の醸造用ブドウ生産量は、干ばつに見舞われた昨年比べて12%増となる76億ポンドと予測される。醸造用ブドウは年の後半(8月～10月)に収穫され、ハリケーンヒラリーの悪影響は見込まれていない。

2022年の醸造用ブドウの品種別破碎量は、カベルネ・ソーヴィニオンがシャルドネを上回り、最も多かった(図6)。両品種の破碎量は2021年よりも少ないが、カベルネ・ソーヴィニオンは、約56万7千米トンですべての品種の破碎量の15.4%を占めた。赤ワイン用品種は、2022年に破碎されたブドウの中で最大のシェアを占め、1米トン当たりの平均価格は、白ワイン用品種の689ドルに対し1,185ドルであった。

図6 2022年のカリフォルニア州のブドウ品種別破碎量でカベルネ・ソーヴィニオンがシャルドネを上回る



出典：農務省農業統計局太平洋地域事務所「2022作物年度ブドウ破碎に関する報告書」

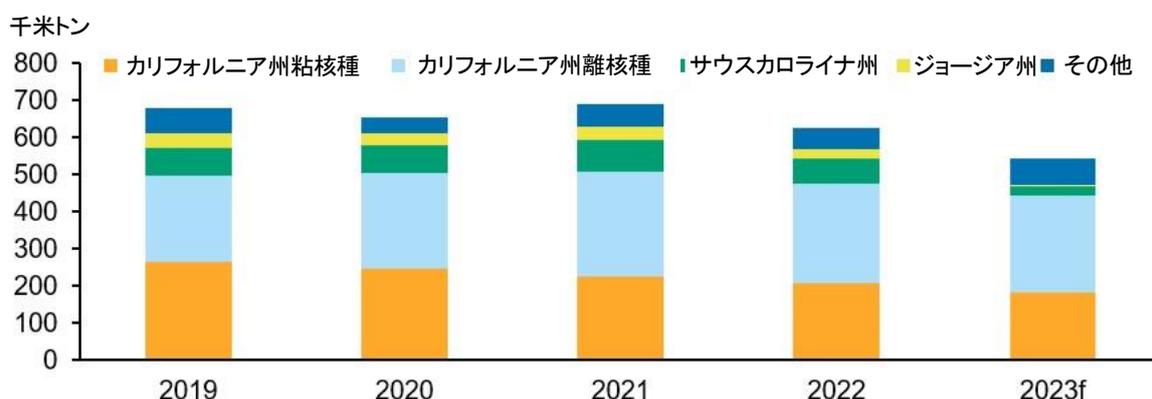
## <モモ> それほど桃色ではない状況 2023年の米国の生産量は減少

2023年のモモの生産量は前年比13%減の54万3,500米トンと予想される。モモの生産量が最も多いカリフォルニア州では、離核種のモモの生産量は前年比2%減の26万米トンと予測される(図7)。離核種のモモの平均約70%が生鮮市場に出荷されるが、粘核種のモモはほぼ加工専用に栽培される。

カリフォルニア州では、春に雨が多く涼しかったため開花が遅れ、低温時間は過去10年間で最長となった。2番目にモモの生産量が多いサウスカロライナ州とジョージア州では、春の低温が2年連続で収量に悪影響を及ぼし、前シーズンと比較して生産量が減少した(それぞれ66%及び78%減少)。カリフォルニア州と南東部の生産量の減少を埋め合わせることはできないものの、農業統計局が調査した州の中で、コロラド州(17%増)、ニュージャージー州(78%増)、ペンシルベニア州(11%増)及びワシントン州(3%増)の4州でモモの生産が増加すると予想される。

国内生産の減少と価格の上昇は、米国の生鮮モモの輸出を弱めた。2023年の年初から7月までの輸出量(生鮮モモ・ネクタリンの合計)は、昨年の同時期と比較して39%減少した。主にチリ産である年初来のモモとネクタリンの輸入量は0.3%減少した。農務省海外農業局は、チリでのモモの栽培面積の減少は、ネクタリンの新植園地の成園化による供給増で埋め合わせされていると報告している。

図7 米国の2023年のモモ生産量は減少



f = 予測値

注: その他の州には、コロラド州、ミシガン州、ニュージャージー州、ペンシルベニア州及びワシントン州が含まれる。

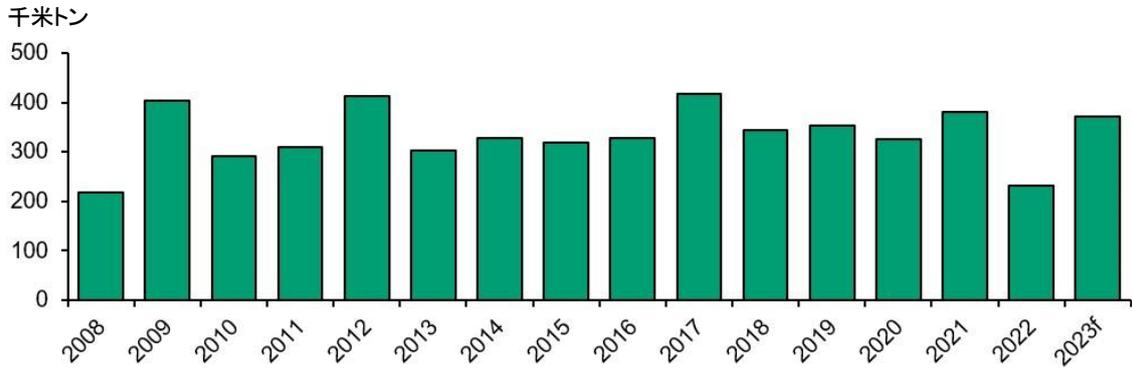
出典: 農務省農業統計局「非柑橘果樹及びナッツ類の概要(各年)」及び「作物生産見通し(2023年8月)」に基づき農務省経済調査局が作成

農務省農業統計局の予測では、主に加工用であるカリフォルニア州の粘核種のモモの生産量は18万5千米トンで、2022年に比べて11%減少する。カリフォルニア州食品製造業者連盟は、粘核種のモモの収量は前年に比べて増加するものの、結果面積は減少するものと予想している。粘核種モモ業界の協同交渉団体である缶詰用粘核種モモ協会は2023年6月、2023年の加工業者との基本価格協定を2022年より米トン当たり32ドル高い635ドルで承認したと報告した。

## <サクランボ> 2023年の甘果アウトウは西海岸での回復で増加の予測

2023年6月の農務省農業統計局の予測では米国の甘果アウトウの収穫量は37万1千米トン(7億4,200万ポンド)で、前年比60%増加する。これが実現すれば、2023年の米国の甘果アウトウの生産量は2017年以来最多となり、前年比では2009年以来最大の増加となる(図9)。調査した3州すべてで生産量が増加したと推定される - ワシントン州(66%増)、カリフォルニア州(45%増)、オレゴン州(59%増)。ワシントン州とオレゴン州は、シーズン中ほぼ理想的な生育条件であった。カリフォルニア州では生産量は増加したが、春の涼しく雨の多い天候により生育と収穫が遅れた。カリフォルニア州の甘果アウトウの平均約80%は、6月にワシントン州とオレゴン州の出荷が増加する前の4月と5月に出荷され、市場に入荷する。農務省農業流通局の出荷データによると、2023年のカリフォルニア州中部産の甘果アウトウのうち、4月と5月に出荷されたのは35%で、6月の北西部からの出荷と重複した甘果アウトウの割合が通常よりも高かった。

図9 米国の甘果オウトウ： 上位3州<sup>1</sup>で2023年の生産量が回復



f = 予測値

1: 生産量に含まれる州は、カリフォルニア州、オレゴン州及びワシントン州である。

出典：農務省農業統計局「非柑橘果実及びナッツ類の概要(各年)」及び「作物生産見通し(2023年8月)」に基づき農務省経済調査局が作成

**2023年の甘果オウトウの輸出は昨シーズンより早い：** 過去5年間の平均では、米国は年間の生鮮甘果オウトウの輸出量の約92%を5月から7月の間に輸出した。2023年シーズンは、生産量の増加に後押しされ、5月から7月までの米国の生鮮甘果オウトウの輸出量は合計1億6,570万ポンドで、前年同期の2倍以上となった。2023年1月から7月の間に、米国は昨年の同時期より28%多い2,910万ポンドの生鮮甘果オウトウを輸入した。

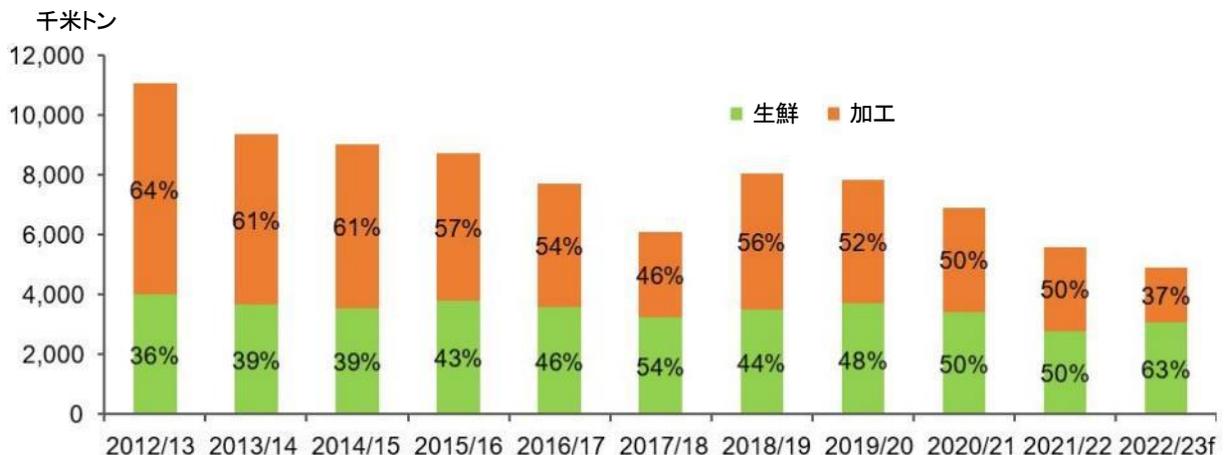
2022年は生産量が少ないこともあり、5月から7月の生鮮甘果オウトウの輸出量は、2002年以来最低の7,720万ポンドであった。

### 柑橘類の見通し

#### <柑橘類全般> 米国の合計生産量は新たな低水準に

農務省農業統計局の2022/23年度柑橘類シーズンの最終推計値によると、米国の柑橘類の生産量は490万メートルトンで、2021/22年度より12%少ない(図12)。これは、米国の柑橘類の総生産量として、少なくとも50年間で最も少ないことを意味する。この歴史的に少ない生産量は、主にフロリダ州のオレンジ生産量の減少によるものである。フロリダ州では2004/05年度以降、柑橘類の栽培面積と収量が長期的に減少している。

図12 2022/23年度の柑橘類の総生産量は減少し、生鮮市場向けの出荷が記録的なシェアに



f = 予測値

出典：農務省農業統計局「柑橘類の概要(各年)」に基づき農務省経済調査局が作成

フロリダ州のオレンジ、グレープフルーツ、タンジェリンの生産量の減少は、柑橘類の果樹が栄養素を処理する能力を妨げ、果実の成熟を妨害し、果樹の寿命を縮める細菌性疾患であるカンキツグリーンング病、別名黄龍病(HLB)に起因するとされることが多い。ハリケーンイルマ(2017年9月)や最近ではハリケーンイアン(2022年9月)などの厳しい気象災害も、前年比の減少に大きく影響していると見られる。

総生産量は、シーズン開始時(2022年10月)の農務省農業統計局の予測を約8%下回った。フロリダ州のバレンシアオレンジとカリフォルニア州のネーブルオレンジ及びタンジェリンの収穫量が予想を下回ったことが、この差の大部分を占めている。しかし、テキサス州のグレープフルーツとバレンシアオレンジ、カリフォルニア州とアリゾナ州のレモンなど、いくつかの品目が予想を上回った。テキサス州のオレンジとグレープフルーツの生産量が昨シーズンに比べて増加したことは、同州の柑橘類に関して励みになるが、グレープフルーツの生産量は、まだ冬の嵐ウリ(2019/20年度)の前の水準に戻っていない。

表3 柑橘類の出荷量 2020/21年度～2022/23年度<sup>1</sup>

品目及び州	出荷量			出荷量		
	2020/21	2021/22	2022/23f	2020/21	2021/22	2022/23f
オレンジ:	----	1,000 箱 <sup>2</sup>	----	----	1,000 米トン	----
早生/中生及びネーブル種						
カリフォルニア州	41,300	31,500	36,500	1,652	1,260	1,460
フロリダ州 <sup>3</sup>	22,700	18,250	6,150	1,022	821	277
テキサス	1,000	170	570	43	7	24
合計 <sup>4</sup>	65,000	49,920	43,220	2,717	2,088	1,761
バレンシア種						
カリフォルニア州	7,700	7,600	6,700	308	304	268
フロリダ州	30,250	22,950	9,650	1,361	1,033	434
テキサス州	50	30	560	2	1	24
合計	38,000	30,580	16,910	1,671	1,338	726
オレンジ合計	103,000	80,500	60,130	4,388	3,426	2,487
グレープフルーツ:						
カリフォルニア州	4,200	4,100	4,000	168	164	160
フロリダ州	4,100	3,330	1,810	174	142	77
テキサス州	2,400	1,700	2,250	96	68	90
グレープフルーツ合計	10,700	9,130	8,060	438	374	327
タンジェリン及びマンダリン:						
カリフォルニア州	28,800	17,500	23,700	1,152	700	948
フロリダ州 <sup>4</sup>	890	750	480	42	36	23
タンジェリン/マンダリン合計	29,690	18,250	24,180	1,194	736	971
レモン:						
アリゾナ州	750	1,250	1,400	30	50	56
カリフォルニア州	21,400	25,200	26,500	856	1,008	1,060
レモン合計	22,150	26,450	27,900	886	1,058	1,116
柑橘類合計 <sup>5</sup>	165,540	134,330	120,270	6,906	5,593	4,901

f=予測値

1 作物年度は、表示された第1年めの開花で始まり、翌年の収穫の完了で終わる。

2 1箱当たりの正味重量(ポンド)

オレンジ: カリフォルニア州(CA)-80(2010/11 作物年度以前は 75)、フロリダ州(FL)-90、テキサス州(TX)-85;

グレープフルーツ: CA-80(2010/11 作物年度以前は 67)、FL-85、TX-80; レモン: 80(2010/11 作物年度以前は 76);

タンジェリン及びマンダリン: CA-80(2010/11 作物年度以前は 75)、FL-95

3 テンプルを含む。2016/17 年度から、テンブルはフロリダ州のタンジェリン及びマンダリンに含まれる。

4 2016/17 年以降、タンジェロはフロリダ州のタンジェリン及びマンダリンに含まれる。

5 端数処理のため、合計が内訳を足し合わせたものと一致しないことがある。

出典: 米国農務省農業統計局「柑橘類の概要 2023」(2023 年 8 月)のデータに基づき農務省経済調査局が作成

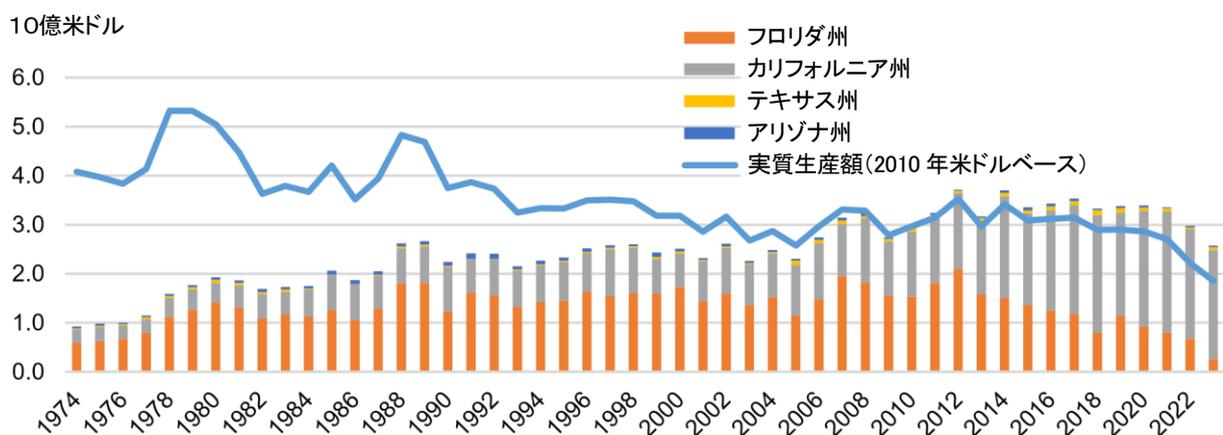
カリフォルニア州は依然として国内最大の柑橘類生産州であり、米国の生鮮市場向け生産量の約92%を占めている。2022/23年度には生鮮市場における米国産柑橘類の量とシェアの両方が顕著に増加した。これは主に、前年度に比べてカリフォルニア州のネーブルオレンジ、タンジェリン、レモンの収穫量が多かったためである(表3)。対照的に、加工用の柑橘類は史上最低の180万米トン(前年度比34%減)であった。

ハリケーンイアンは2022年9月下旬にフロリダ州南西部に上陸し、その後北東に進む進路を取り同州の主要な柑橘類産地の多くを通過した。

ハリケーンは一般にフロリダ州の農業にとって長年の課題となっている。強風は柑橘類の果樹を傷つけ、花や未熟な果実、熟した果実に損傷を与える可能性がある。花や果実のこの損傷は収量の減少につながる。さらに、ハリケーンがもたらす大雨による洪水は、果樹を倒し、収穫を阻害する可能性がある。フロリダ州の2022/23年度の柑橘類総生産量は81万1千米トンで、前シーズンに比べて60%減少した。前年比の減少のうちどれだけがハリケーンイアンによる被害に直接起因しているかは不明であるが、実際の出荷量はシーズン開始時の予測を下回った。ハリケーンイアンによる損失をまだ考慮していない2022年10月の当初の予測では、フロリダ州の生産量は約140万米トンと推定されていた。したがって、前のシーズンと比べて2022/23年度のハリケーンイアンに起因する損失は、州の生産量の42%にも上る可能性がある。テキサス州は今シーズン、より多くの栽培面積が成園化したため、バレンシアオレンジの収穫量が同州らしくないほど多かった。一方、テキサス州の早生と中生のオレンジの収穫量は2万4千米トンで、過去10年間で2番目に少なかった。アリゾナ州では、結果面積が減少傾向にあるにもかかわらず、レモンの生産量が昨シーズンに比べて12%増加した。

**2022/23年度の米国の柑橘類生産額は減少:** 2022/23年度の米国の柑橘類生産額は26億ドルと評価された。この生産額は、前年度(2021/22年度)の値を13.5%下回っており、インフレ調整後の実質の価値では16%減少した。この実質価値の低下率は、前年度(-17%)と比較してわずかに小さい(図13)。

図13 2022/23年度の米国の柑橘類生産額はさらに低下



2023年は予測値

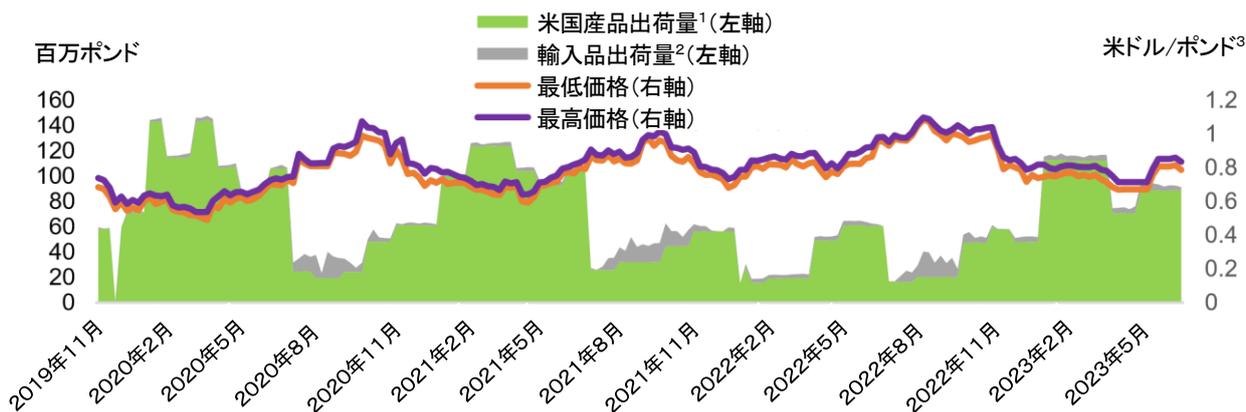
出典: 農務省経済調査局、農務省農業統計局「柑橘類の概要」

**米国産柑橘類の2022/23年度の生鮮市場向け出荷量は増加:** 米国産柑橘類の2022/23年度の生鮮市場向け出荷量は300万米トンに達し、前シーズンから10%増加した。品目別では、オレンジ(2%増)、グレープフルーツ(5%増)、レモン(8%増)及びタンジェリン(29%増)が増加した。米国でのオレンジの販売年度は、前年の11月に始まり、当年の10月まで続く。ネーブル種やその他の早生/中生の品種の収穫は晩秋に始まり、通常は春先まで続く。一方、バレンシア種の収穫は春に始まり、秋まで続く。米国の生鮮市場向け柑橘類出荷量の半分弱を占める生鮮オレンジは、2022/23年度にはカリフォルニア州とテキサス州でのネーブル種と早生/中生品種の増加により、前シーズンより多い144万米トンとなった。

### <オレンジ> 供給量の増加に伴い生産者価格は低下

11月から7月までの生鮮オレンジの1箱当たり平均樹上相当価格は、2021/22年度の25.91ドルから2022/23年度には20.52ドルと約21%下落した。農務省農業流通局の消費地市場価格データによると、今シーズンは卸売価格も下落しており、11月から6月までの平均最高価格は、昨シーズンの同時期の1ポンド当たり0.85ドルに対して、1ポンド当たり0.81ドルであった。オレンジの出荷は、中生の収穫が終わる前の1月から3月にかけてピークに達した(図14)。

図14 2022/23年度はオレンジの出荷量が増加し、卸売価格は下落



1 米国内のフロリダ州、カリフォルニア州、テキサス州から調達した商品の出荷量

2 海外から調達した商品の出荷量

3 1ポンド当たりの平均最低価格と最高価格は、パッケージ当たりの公表されている価格を重量(ポンド)で割って算出した。ニューヨーク市卸売市場の価格を用いた。週ごとのポンド当たり卸売価格は、当該商品(オレンジ)について報告されたすべての品種とパッケージ形態の単純平均である。1パッケージの重量は20~600ポンドである。

注: 農務省農業流通局のカリフォルニア州産柑橘類のトラック出荷に関する移動データは、3か月間の週当たり平均出荷量を表しており、実際の週ごとの出荷量の変化を反映したものではない。

出典: 農務省農業流通局の市場価格データに基づき経済調査局が作成

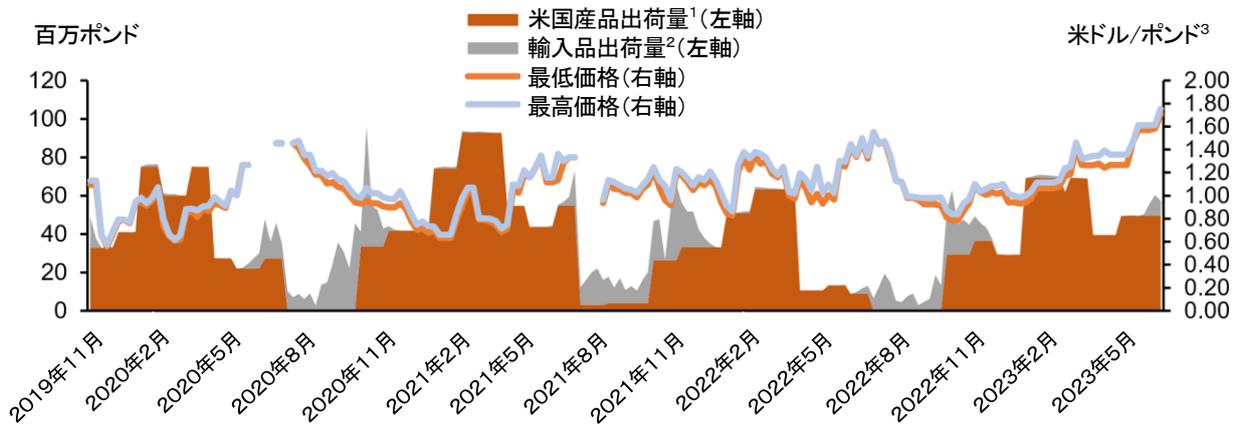
2022/23年度(11月~7月)の米国の生鮮オレンジ輸入量は、前年同期に比べて9%減少した。昨シーズン(2021/22年度)は、国内生産量が従来に比べて非常に少なく、メキシコ(米国の生鮮市場への外国産オレンジの主要供給国)の生産が増加したことから、生鮮市場向けオレンジの輸入に関して記録的な年であった。現在のところ、2022/23年度の輸入量は、過去3年間の水準である4億7,500万ポンドに近づいている。メキシコは今シーズン、生鮮市場向け外国産オレンジの52%を占める最大の供給国であり、チリ(24%)と南アフリカ(12%)がそれに続いている。南アフリカは今シーズン収穫量が多く、このことが米国市場へのオレンジ供給国の中で第3位に復帰した理由を説明している。

オレンジの輸出は2022/23年度これまでに1%減少しており、2010年以来の最低水準に達すると予想される。米国産オレンジの最大の輸出市場であるカナダへの輸出は今シーズン13%増加したが、一方、韓国への輸出は15%減少し、香港と日本への輸出はそれぞれ2%減少した。これら4か国を合わせると、米国の生鮮市場向けオレンジ輸出全体の3分の2を占めている。

### <タンジェリン> 2022/23年度の米国の出荷量が回復

生鮮市場向けの米国産タンジェリン、マンダリン、クレメンタイン及びタンジェロ(これらは集散的にタンジェリングループを構成する)の2022/23年度の生産量は、97万1千トンに達し、前のシーズンから32%増加した。米国のタンジェリン出荷量の95%はカリフォルニア州で栽培されており、生産はサンホアキンバレー地域に集中している。米国の出荷は通常、冬の終わりから春の初め(1月~3月)にピークに達する。農務省農業流通局の出荷データによると、収穫のピーク時に8億2,300万ポンドのタンジェリンが出荷され、前年同期に比べて8%増加した(図18)。2022/23年度シーズンにカリフォルニア州セントラルバレー地域で激しい洪水によって引き起こされた収穫の遅れを考慮すると、このタンジェリンの出荷量の増加は注目に値する。

図18 2022/23年度ピークシーズンのタンジェリン出荷量が増加



1 米国内のフロリダ州、カリフォルニア州、テキサス州から調達した商品の出荷量

2 海外から調達した商品の出荷量

3 1ポンド当たりの平均最低価格と最高価格は、パッケージ当たりの公表されている価格を重量(ポンド)で割って算出した。ニューヨーク市卸売市場の価格を用いた。週ごとのポンド当たり卸売価格は、当該商品(タンジェリン)について報告されたすべての品種とパッケージ形態の単純平均である。1パッケージの重量は5~100ポンドである。

注: 農務省農業流通局のカリフォルニア州産柑橘類のトラック出荷に関する移動データは、3か月間の週当たり平均出荷量を表しており、実際の週ごとの出荷量の変化を反映したものではない。

出典: 農務省農業流通局の市場価格データに基づき経済調査局が作成

2022/23年度のピーク月の出荷量の増加にもかかわらず、農務省農業流通局の「市場ニュース」によると今年の卸売価格は上昇し、2021年11月から2022年6月までの平均最高価格が1ポンド当たり1.20ドルであったのに対し、2022年から2023年にかけての同時期には1.26ドルであった。ただし、収穫のピーク期間(1月~3月)だけを取り出して見ると、1ポンド当たりの最低卸売価格は前年の1.15ドルに対し1.13ドルに下落した。2021/22年度と比較して2022/23年度の価格が下がったこの期間は、商品の供給量の増加が市場均衡価格の低下に対応することを示唆する基本的な経済理論と一致している。

タンジェリンは、多くの食料品店で一年中購入できる人気の高い柑橘類である。国内生産量は米国で消費されるタンジェリンの約60%を占めるに過ぎず、国内の出荷量が減少する7月から10月の間は輸入が特に重要である。ただし、タンジェリンは一年中輸入されており、米国産タンジェリンの出荷のピーク時(1月~3月)でも少量が輸入されている。国内生産量の増加もあり、2022/23年度の生鮮タンジェリンの輸入量は過去最高であった昨年に比べて25%減少した。米国によるタンジェリンの輸入は、今年度の終わり(2023年10月末)までに8億ポンドに達すると予想される。米国市場向け外国産タンジェリンの最大の供給国であるチリは、輸入量の32%を占めている。モロッコは米国向けの2番目に大きな供給国で輸入量の29%を占め、ペルーは18%で3番目である。

2022/23年度の生鮮タンジェリンの輸出量は、前の年度(2021/22年度)に比べて72%増加し、10月末の年度の終わりまでに1億1,300万ポンドに達すると推定される。米国産タンジェリンの3大輸出市場(カナダ、メキシコ、日本)は、米国の輸出量の82%を占める。この輸出量の多さは、通常カナダ向けタンジェリンの最大の供給者であるEUとモロッコでの生産量の減少に呼応したものである可能性がある。今シーズン(2022/23年度)の米国のタンジェリン生産量は昨年度(2021/22年度)に比べて32%急増したが、輸出が増加したため米国民1人当たりの流通量は18%しか増加しなかった。2022/23年度の生鮮タンジェリンの米国民1人当たりの流通量は6.24ポンドと推定される。

#### <オレンジ果汁> 2022/23年度の製造量は新たな最低水準に

農務省農業統計局の2022/23年度の当初予測では、フロリダ州のバレンシアオレンジ生産量はすでに歴史的な低水準の1,700万箱、すなわち76万5千メートルトンと推定されていた。ハリケーンイアンによる損失を考慮して生産量は下方修正され、最終収穫量は960万箱(43万4千メートルトン)となり、当初の予測より43%減少した。フロリダ州で栽培されたバレンシアオレンジの96%が加工用に出荷されるため、国産オレンジ果汁の製造量

は昨シーズンに比べて50%減少し、少なくとも50年間で最低の水準(1億1,180万ガロン)となった。

従来はフロリダ州産のオレンジは、米国で加工用に出荷されるオレンジの約85%を占めていた。しかし、フロリダ州の加工用オレンジのシェアは今シーズン60%に減少し、残りの40%はカリフォルニア州とテキサス州が占めた。米国のオレンジ果汁輸入量は今シーズン30%増加して5億7,400万ガロン(ストレート果汁換算(SSE))となり、国内の製造量がハリケーンイルマの影響を受けた2017/18年度に見られたのと同様水準の急増となった。ブラジルとメキシコが依然として米国市場へのオレンジ果汁の最大の供給国であり、それぞれ輸入量の73%及び19%を占めている。輸入品が国内の流通量に占めるシェアは増え続けており、2022/23年度に米国の消費者が入手できるオレンジ果汁の推定82%を占めている。

オレンジ果汁は一般的に冷凍濃縮オレンジ果汁(FCOJ)と非冷凍濃縮果汁(NFC)の2つのカテゴリーのいずれかに分類される。従来フロリダ州では、オレンジのほとんどはFCOJに加工されてきた。しかし、それは今世紀の始め頃に変り始めた。2004/05年度までに、フロリダ州で製造されたオレンジ果汁のほとんどはNFC用の品種となった。一方、輸入品はNFCとFCOJにもっと均等に分かれるが、どちらも1990年代後半から減少してきている。

米国のオレンジ果汁輸出は、今シーズン(2022/23年度)史上最低の3,160万ガロンとなり、2021/22年度の水準を約25%下回った。カナダ、ドミニカ共和国及びメキシコが、2022/23年度の米国産オレンジ果汁の主要輸入国であった。今シーズン製造量が50%減少したにもかかわらず、国内の1人当たりのオレンジ果汁流通量は昨シーズンより約6%少ない2.09ガロンであった。減少率が比較的小さいのは、輸入量の増加と冷凍品の在庫の販売によるものである。期末在庫量は1億7,270万ガロンと予想されており、これは従来に比べて少なかった昨年度の期末在庫量を20%下回っている。

#### <今後の見通し> 2023/24年度の米国の柑橘類生産量は2022/23年度の水準を上回る可能性

農務省農業統計局は、米国の2023/24年度的全柑橘類生産量の最初の予測を2023年10月に公表する予定である。一方、カリフォルニア州政府の食料農業局が農務省農業統計局太平洋地域事務所と合同で9月12日に公表した2023/24年度カリフォルニア州ネーブルオレンジ客観的測定レポートによると、早期の予測として、カリフォルニア州のネーブルオレンジの生産量は7,400万箱(40ポンド/箱)で、これは直近年に比べて1%の増加となる。この予測出荷量の増加は、主に昨年に比べて果実のサイズが大きいためである。ただし、果樹1本当たりの果実数は、2023年の351に対して2024年は335に減少すると予測されている。

フロリダ州におけるオレンジとグレープフルーツの2023/24年度シーズン最初の成熟度テストの結果は、9月12日に農務省農業統計局によって公表された。サンプリングされた果実は、ネーブル種を含む早生オレンジ、中生オレンジ(主にバレンシア種)、赤と白の種なしグレープフルーツ等であった。その結果によると、2023/24年度産のすべての種類のオレンジで、昨シーズンの同時期と比較して、原料果実1箱当たりの原料果汁と固形物が多くなっている。ここで原料果汁とは、パルプやその他の固形物が除去される前の未調製の果汁のことである。赤肉のグレープフルーツでは原料果汁と固形分が2022/23年度をわずかに上回ったが、白肉のグレープフルーツでは下回った。

黄龍病(HLB)としても知られるカンキツグリーニング病は、生産コストを押し上げ、収量を減らし、結果面積を減らすため、フロリダ州の生産者にとって引き続き脅威となっている。フロリダ州では、今シーズンの総結果面積がさらに12%減少して29万8,400エーカーとなった。他の柑橘類生産州では、カンキツグリーニング病はそれほど蔓延していないが、生産者が予防策として農薬の散布を増やし、より厳格な輸送手順を採用するために生産コストが高くなる可能性がある。カリフォルニア州では2022/23年度のタンジェリンとレモンの結果面積の増加がオレンジの栽培面積の継続的な減少を上回り、柑橘類の総結果面積が昨シーズンよりもわずかに増加した(1%の約3分の1に当たる900エーカーの増)。テキサス州では、グレープフルーツとオレンジの栽培面積が共に減少し、総栽培面積が9%減少した。アリゾナ州では、レモン(同州の主要柑橘類)の栽培面積が4%減少した。フロリダ州とテキサス州の柑橘類栽培面積の長期的な減少傾向と長引くカンキツグリーニング病の問題にもかかわらず、ハリケーンイアンのような厳しい気象災害が無ければ、2023/24年度の柑橘類の総生産量は2022/23年度の水準を超える可能性がある。(2024年3月に「黄龍病」の表記を修正)